宗像

毎月一日発行
発行所
宗像大社
宗像会
福岡県宗像郡玄海町
電話玄海代③1311
定価一年送料共　1000円

神具、装束
結婚式場用品
株式会社 井筒
本社　京都市下京区油小路六条北入（〒600）
電話京都（075）三六一－一三三四・六〇六六番
九州店　福岡市吉塚二丁目三番三号（〒812）
電話福岡（092）六一五－九四五六番

第二十回中津宮七夕揮毫会

豆書道家大いに腕をふるう

作品にとりくむ参加者

去る七月二十四日、中津宮鎮座の大島において、恒例の七夕揮毫会が開催された。特に本年はこの揮毫会が発会して二十周年とあって参加者も多く、大会は盛会であった。

当日は厳正なる予選審査を通過した約六五〇名の小・中学生が参加し技倆を競いあった

海上も穏やかで日本晴の天候の下、参加者は朝早くから、父兄や先生に引率されて、神湊の波止場に集合。神湊と大島とを結ぶ渡船「弁天丸」がフル回転で運航し、この日の大島は終日これら関係者で溢れた。

会場の大島小、中学校では、午前九時競書が開始されるや、豆書道家は引率の先生、父兄の心配をよそに一心に筆を運ばせた。作品はいずれも実力が伯仲し見事な出来ばえであった。審査の前に作品は中津宮神前に奉献され、午後一時からは、鳥居前の海浜ではサザエ採りが行なわれ、参加者と父兄が共に楽しんだ。

その間、審査は中津宮斎館で坂口雅風、城戸筑山両先生によって行なわれたが、甲乙つけ難い優秀な作品が多く、再審査が行なわれる程であった。

表彰式は、午後四時から中津宮社頭で行なわれた。葦津宮司より当大会に永く功労のあった坂口雅風、城戸筑山、大隈正義、尚文堂各位に感謝状が贈呈された後、審査の先生より講評が述べられ、参加者全員に今後の精進を期待された。

次いで賞状並びに賞品が表彰者に手渡され二十周年記念揮毫会を無事終了した。

表彰者氏名

小学生の部

特選

（一年）力丸てつや（玄海）、永島明（東郷）、中山ゆり（日の里）（二年）森田健久（赤間）、立部敦士（玄海）（三年）原康（大利）、遠藤恭子（大島）、川島美樹（東郷）（四年）荒木智美（津屋崎）、長瀬健一郎（同）、永嶋聡志（赤間）（五年）政岡依子（赤間）、高田修（福間）（六年）浜裕子（津屋崎）、橋田秀幸（同）

準特選

（一年）山本公子（岡垣幼稚園）、しぎょうゆか（赤間）（二年）田志純子（大島）、船越みき（同）、古賀英知（赤間）、高原真美（同）松井和元（東郷）（三年）遠藤真由美（津屋崎）、山本玲子（赤間）、石原陽子（同）、松尾由美（同）、安井恵行（東郷）・（四年）金谷理夏（赤間）、荒川勝典（同）、中山深（東郷）、吉田康政（同）、熊谷俊広（同）（五年）高崎由起子（赤間）、秋田恭末子（同）、中村由佳（同）、亀崎聡子（大野）、千原博美（河東）（六年）本松泉（津屋崎）、中島勝己（那河南）、前野恵（河東）、中山洋（玄海）

金賞

（一年）森良博（東郷）、よしたけひろみち（南郷）（二年）吉武てるか（東郷）、吉水りえ（赤間）、松尾智子（同）、中村美香（同）、梅田陽（同）、中野けん一ろう（河東）（三年）吉武良浩（東郷）、藤吉真理子（津屋崎）、阿部美奈子（同）、松尾美保（赤間）、日高由美子（同）、萩尾昇重（同）（四年）牧好浩（日ノ里）、宮田照代（赤間）、山崎淳子（同）、宮木美和（玄海）、水田貞之（同）、磯部伴子（同）（五年）阿部厚子（津屋崎）、前原裕美（赤間）、小田直子（同）、下司なぎさ（玄海）、高島勉（同）、中村博人（大島）（六年）吉村博幸（津屋崎）、吉田浩二（東郷）、安井元昭（同）、池浦文則（吉武）、小畑由美（吉木）

中学生の部

特選

一年　宗像　千賀　玄海中
二年　蒋田　千鶴　福間中
三年　荒川貴美子　城山中

準特選

一年　高田　和子　福間中
　　　高島　亮一　玄海中
二年　松原　敏弘　三筑中
　　　小川とよみ　中央中

金賞

一年　遠藤雅恵（大島）、三木隆博（三筑）、石松和徳（城山）
二年　浜英明（津屋崎）
三年　前田りつ子（香椎第二）

最優秀賞

小学生の部　橋田秀幸（津屋崎）
中学生の部　蒋田千鶴（福　間）

論説

人生歯車が平凡に廻る時

人間は夫々さまざまの人生を歩む。その希望の方向に自由に歩いている者は、ひとりもいない。他の如何なるものの制約も受けず自我中心に生きていると思っても、社会の一員であるからには、所詮組織の枠外に立つことはできない。それは多くの歯車の結合したシステムの中の一歯車、強いて名づけると多数とかみ合って廻る一個の人生歯車だからである。

自然児として生存を始めた時、家庭の一員である。学業の間も学校の一員、就職すれば職場組織の一歯車、常に織立てられた社会という機構の一分子として生きる人間、その人生も歯車と見られよう。歯車は廻らねばならない。

自己の故障は他の廻転に影響し迷惑をかける。他に不調が起っても、かみ合って動いている一歯車である以上、ひとり安全に順調にありたくとも無理である。

その人生歯車が、平凡に廻るとき、家庭であれ職場であれ、幸福なときである。平凡は幸福である。凡人の平凡な生活こそ、幸福な人生の歩みがあることを考えてみたい。

少し話が飛躍するが、先ほど福岡で長谷川労相が、最近の労働問題について、と題して講演した折の強調主旨を取りあげてみる。労相はインフレと不況、それに伴う雇用不安を「国難」という現今聞かれない言葉で指摘し、労使は対決でなく相互の連帯感をもって、今後の国難克服のスタートにしなければならないと警告した。

不況が国家の命脈を危くし、国民生活を破壊する国難とは、耳新しい戒めである。わが国にも歴史上何度かの国難と呼ばれる危局があった。然し、史上の国難は海外よりの武力による来襲圧迫を指したもので、物価上昇や失業増加を呼んだことはない。春闘ゼネストで通勤通学に支障があっても、一般に国難などと大げさに思う者はいない。

国内国外の経済異変の影響から起った物価と雇用の問題は、政府の責任として為政者の公約必守によって解決すべき政治課題で、一般国民が国難などと戒めを食う筋合ではない。感心しない。

むしろ労相が、失業は人生最大の不幸、と述べて値上げムードの抑圧と雇用促進を力説した点に、国民の不幸軽減を考える民主政治があり、凡人政治家の味があった。

神は特に凡人を愛される、そうでなければ神がこんなに多数の凡人を造られるはずがない、と偉大なる凡人政治家リンカーンは言っている。出世する偉い人間でなく、ささやかな家庭や職場を守って平凡に廻る人生歯車、そこに凡人が平凡な意思をもって作った幸福があり、人生の真髄がある。

偉くなりたい、出世したい、その為に少しでも障害になるものは排除し不幸の因素と思うのは駆逐しようとする非凡な意思が起った時、労相ではないが歯車狂乱の大難が見舞う。最近特に目につくのが母親による子殺し事件の続発である。愛情の枯渇か錯乱か、幸福希求への浅慮か妄断か、取材の若い記者も残酷に涙する。

「母よ殺すな」と題する身体障害者の手記が出版された。殺される側としての脳性麻痺者が、手や言葉の不自由を無理して書いた血涙の訴え、福祉関係者等の強い関心を呼んで、既に初版は売切れとなり、再版中と伝える。脳性麻痺児殺害の母について手記は言う。

「なぜ彼女が殺意をもったのだろうか。この殺意こそがこの問題を論ずる場合のすべての起点とならなければならない。こんな姿で生きているよりも死んだ方が幸せなのだと思ったという。なおるかなおらないか、働けるか否かによって決めようとする人間に対する価値観が問題なのである」と。

心を鬼にして刃を幼いわが子に向けた母親も犠牲者に違いない。手記が言う如く、殺された子の命の貴さに差はないのだから、殺意の起点に問題がある。

世間態や邪魔だからと、コインロッカーに赤児を投げ込む女性は、もともと人生歯車が狂っているのだが、東大出身でエリートコースを歩む中年銀行員の場合は、出世とか幸福とかを、平凡を脱する非常手段に求めた殺意の起点に、肩書亡者、非人間性、エゴイズムが存在した。平凡の持つ幸福、非凡の包む不幸、その判別に思慮の及ばぬ秀才であった。

凡人でよい、えらくならなくてよい。人生歯車が平凡に廻ることを喜ぶ凡人は幸福である。いつまでも凡人でありたい。

阿蒙少言

選挙で街が騒がしくなると、いつも尾崎咢堂翁の面影が浮ぶ。明治二十二年憲法発布は古い話だが、当時から若くして代議士となり、昭和十何年かに亡くなるまで連続当選、無類の記録を残した政治家であった。堕落の政治屋とは月とスッポンのちがい ○尾崎翁は国会開会中以外は、テオドラ夫人と共によく洋行した。世界の動きを肌で識り、その国際感覚を政治理念に盛る勉強を怠らなかった。昨今芸能人や実業家の海外旅行はとも角、公費を使いもっともらしい名目をつけた議員の海外視察も少くない。慰安旅行に効果は期待できない、ロバは馬になって帰ってくるはずがない ○少言子が学生の頃、翁が米国旅行中に議会解散があった「立候補の件承諾す」とは支援団体の咢堂会の要請に対する返電。まことに堂々たる面目を見る。国家国民のために働くのだ、よろしく頼むとは返電しない信条、この人にしてこの自信 ○翁の爪の垢でも煎じて飲ませたいのは？選挙区要所で只一度の政見演説会、決して写真入りのポスターなど出さない、お願いしますと一言半句も呼ばない、言葉だけ選挙ごとに聞くクリーンで、不潔の泥仕合とは、全く別世界の感 ○「やれやれ、やっと静かになった、この頃社寺の縁日に乞食の嘆願は姿を消したが、哀願懇願の連呼がそれに代って流行」と、皮肉居士が投票日に吐き捨てる。然し、そうしなければ落選するとなると、真の民主政治が疑われる ○事前運動、人気歌手なみの顔写真、お祭り騒ぎの虚勢、悪質な買収暗躍は増えるばかりで尾崎翁が生きていたら、今日の選挙合戦の様相を罵倒するだろう ○「シンショクを忘れて皆様のために」と、神主候補コウヤク張る。鎮守の森の鳥が戒めたか知れない「鴉のまねをしてはいけないと」。

（白雲）

暑中御見舞申し上げます

APOLLO　出光

福岡市中央区大名2丁目8番26号
出光興産株式会社福岡支店
支店長　鶴　常敏

北九州市門司区錦町3番7号
出光興産株式会社門司支店
支店長　村上義明

沖ノ島の自然を追って
—ＮＨＫ取材班の活躍—

去る六月十六日より同二十七日までの十二日間、玄界灘に浮ぶ神秘の島、神島沖ノ島でＮＨＫ「自然のアルバム」の取材撮影が行われた。以下は丁度期間を同じくして同島に勤務した当社神職の同行記である。

六月十六日、筑前大島から海上保安庁所属灯台見廻船「げんうん」に便乗、船長から「今日はベタ凪ですよ」と言われ安心したのも束間、大島を離れると忽ち船は左右にローリングする。玄界灘の波濤は荒い。船室に仰臥すること三時間半、内陸から六十キロの紺碧洋上に屹立する緑の島宗像大社の神島沖ノ島に到着した。今回は小職の他に便乗者がいた。ＮＨＫの取材班 四名である。「自然のアルバム」を製作する為はるばると沖ノ島にやって来たのだ。沖ノ島の鳥類は夥しい数にのぼる。この鳥類の自然の姿を紹介するのが同番組のねらいとのこと。取材班四名の内二名は福岡教育大学の学生、鳥類研究サークルのリーダーである。

沖ノ島の岸壁にアリフレックスの撮影機、カメラ、三脚、バッテリー等、ジュラルミン製のトランク類、大きくふくらんだリュックサック、ダンボール箱に詰められた日用品、ガスボンベ等が陸揚げされる。ＮＨＫ取材班の長期滞在のために沖津宮新社務所の一部屋を用意していたが、四人では手狭のため、永年使用した仮社務所を提供することになった。

仮社務所には送電していないので新しく配線して裸電球六十ワット一個をぶら下げる。

炊事は漁師小屋の炊事場を借用することゝなった。

島内唯一の運搬車であるリヤカーと工事用の一輪車で荷物運びが終ると、沖ノ島上陸の慣習に従って全員海水禊ぎとなる。梅雨空のもと海水は意外に冷い。

翌日からＮＨＫ取材班は、資料を頼りに梅雨空の晴れ間を縫って原生林に分け入り、鳥影を追った。

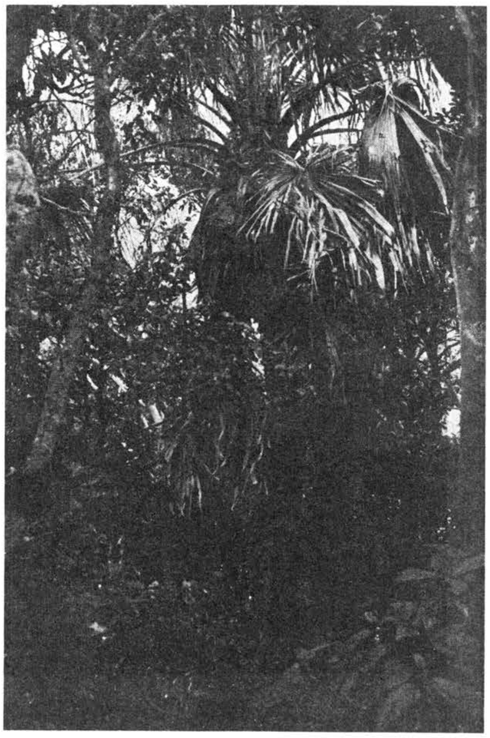
六月〇日　午前二時、低く垂れ込めた雲にさえぎられて星は見えない。昼なお暗い密林は漆黒の闇である。懐中電灯の灯りを頼りにタブの原生林に分け入る。オオミズナギ島の生態をフイルムに収めるために。樹林ではギャギャと鳴きながら鳥は列をつくり、嚇嘴をピッケルの様に操って一歩一歩傾斜したタブの樹を登る。樹上から海面目指し滑空し浮力をつけて飛ぶためだ。こうして暁闇の密林は嘘の様な静けさをとり戻す。

六月〇日　久し振りの快晴、一ノ嶽頂上附近に旋回する鳥を発見、鳶だ、鷹だと諸説紛々、朝食の後、調査のため登山となる。八合目附近一帯はタブの原生林が傾斜した岩肌から水平に靡くように生茂っている。灌木の間隙から中空に舞う件の鳥を真近に発見、鷹でなく隼であった。灌木がまだらの岩場に出た時、いきなり一行の頭上を警戒音を発し、鋭い爪をむいて急降下威嚇する鳥の姿に一行は驚いた。多分附近に巣があり雛がいるかも知れない。隼の襲撃を警戒しながら附近を目で探すが、灌木の上にあるのか、緑色に蔽われてわからない。巳むを得ず隼の急降下をフイルムに収めて下山した。

六月〇日　沖ノ島の夜明けを撮影のため、未明東側の岩場に三脚を立てゝ陣どる。水平線から徐々に昇る太陽、黎明の海面を黒い小島の一群が横切る。何度撮っても感動的シーンである。

六月〇日　カンムリウミスズメを撮影するため、沖ノ島前方約一キロの小島、小屋島に渡る。海面から高さ十米、島の平垣地十五平方米の岩礁、この小屋島の草叢はカンムリウミスズメの生息地である。しかし、ここはまた絶好の釣場のためか、空罐、腐敗した魚の餌等、釣人のゴミが散乱している。釣人のマナー向上を望みたい。

撮影班取材記はまだまだ続くのであるが、紙面の都合で割愛したい。尚、この記録は「自然のアルバム」ＮＨＫ総合テレビで八月三日放映された。



原生するビロウ樹（亜熱帯植物の北限）

社務日誌抄

六月九日　福岡県神社庁新庁舎竣工落成式、宮司外四名出席
六月十日　責任役員会（決算報告）
十一日　愛知県砥鹿神社職員六名参拝
玄海町成人学級
六月十二日　造営誌会議
二見興玉神社職員十四名参拝
十三日　出光石油化学千葉工場長外一名参拝
石清水八幡宮職員十五名参拝
砥鹿神社東三河支部役員十二名参拝
六月十五日　月次祭
十七日　福岡県神職総会於神社庁、宮司外四名出席
二見興玉神社職員十四名参拝
十八日　陸上自衛隊幹部学校長外十一名参拝
十九日　佐田茂教育大講師来社
六月二十日　神道青年会々議出席於太宰府天満宮
出光興産石田社長参拝
二十三日　石清水八幡宮職員十五名参拝
二十六日　日吉大社職員参拝
二十七日　夏樹静子外九州出身作家出版協会々員十五名参拝
京都福岡県人会三十名参拝
出光石油化学大和副社長参拝
六月三十日　宗像郡郷土芸能振興会々議、於斎館
夏祭神賑行事打合せ会、於斎館
七月一日　月次祭
三日　一条流家元一条扇翠、新作舞奉納
四日　氏子評議員会、於斎館
六日　長門博物館五十名参拝
ロータリークラブ交換留学生スーザン嬢一家参拝
浦安舞講習の為、多静子神社本庁講師外一名来社（講習八日まで）
九日　宗像署柔剣道対署試合必勝祈願祭
十日　長崎県立博物館々員二名来社

外遊雑話　猫も杓子も　(3)

延喜式北極を飛ぶ

日航機は学生旅行団の外に、一般旅行者を乗せて羽田を発った。猫も杓子もタラップを上るまでは、厳重な監視の中を通過する。ハイジャック出現の危険多い世情、老人だから女性だからと区別されることもなく、所持品に特に目が光るのもやむを得ない。

乗客の中には数名の外人も居る。アラスカのアンカレッジ空港まで六時間余、国内旅行とちがって多くは始めての外国行きだから、何となく特異の感懐も浮かぶ。

それでも学生はよく話した。「先生は何の講義をされていますか」と平句先生に尋ねる学生もある。周囲の座席は、Ｎ市のＫ短大の学生たちで、だんく気分が打ち解け寛いだ頃だから、この老体は教壇で何を講義しているのだろうかとの興味が出たらしい。

前期が神道思想史で、対象は国文学科三年生、わが民族固有の神道思想に外来思想の習合変遷の歴史的経過が眼目。後期は延喜式で、言うなれば平安朝時代の法律。先月末にその延喜式を終って、試験をすませたばかりだと説明する。大抵が英文科らしく、延喜式について更に不可解な謎でも解くような質問。国文学作品に流れている時代思潮を知識にする特殊講義も、厄介なものだと言わぬばかりの顔をする。

延喜式アラスカを越えて、花のパリへとは、衣冠束帯の大宮人がダンス・パーティにでも現われるのかの想像も湧いたのか、微笑も出る。それでも、老いた白髪大納言をいたわる感情もあって、対象的な老若の会話も楽しい雰囲気になってきた。

旅行会社から添乗員として派遣され、欧州各国三週間の巡歴を、これから案内役をつとめるＦ君は、既に何回かの海外旅行団に同行の経験を持っているので、事務的な処理や宴所の解説にソツがない。通りがかりの日航乗務員をとめて、近い席の学生たちに聞えるように種々の説明を求める。

機は海洋を過ぎてアラスカの氷原にかゝっている。起伏重畳の山々は雪を被って平地はあまり見られない。二三の特に高い峯や特徴のある峡岳には名があり、乗務員は案外を見下しながら教えたが、そんな名称などはどうでもよい。

「この辺の地上に降りたら絶対に助かりません」と結んで去った。

間宮林蔵とかいう江戸時代の探険家、白瀬中尉の明治の冒険隊、いづれもアラスカの白皚々の辺境を見るなどは思いもよらなかったことである。

アンカレッジ空港着陸。部落らしい姿が周辺に散在、それを結ぶ自動車道も氷原の中にある。千古の雪を頂く尖った山頂が、とても動物の住める天地でないと物語っているようである。住民は殆んどがこの関係者で、部落は悉くその住宅であろう。

ロビーの売店見物、中年の日本女性が勤めている。帰国の際のみやげ物の免税などに商売気を見せる。この調子なら、世界中どこへ行っても日本人の逞しい商魂が働いているだろうと感ずる。

米国各地へ出発する欧州から来た外人も居る。中に若い夫婦、妻君は日本人らしい。すべてが長い歴史の伝承した民族凝固とも言える枠を離れて、今や時代はすべてが国際的である。もっと言葉を変えると、言語習慣の文化面はもとより、民族性の血も魂も地球的に分散し混淆してゆく時代となった。自然の勢、この流は続く。

トランク一つ持って空路飛んで外国へ嫁ぐ花嫁は、家門も格式も民族の誇肩もいらない。清和源氏の末流とか、名代の家筋とか、水呑み百姓の子孫とか、外国人との国際結婚には何の自慢の種にもならないし、反対に障害の因ともならない。日本的なものへの強い執着を捨て得ない者にとっては、時代が大事な宝を壊してゆくような悲哀がある。ごもっとも。

西ドイツから来た青年が、学生グループに何か話しかけている。「先生、サインを求めているのですが」と一服中の半句先生を促す。ニューヨークに飛ぶハンブルグの商社員で、人なっこいまなざしに好感が持てる。

「山川に風のかけたるしがらみは、流れもあえぬ紅葉なりけり」と、突差に浮んだ古今集を走り書き。署名はしない。猫や杓子の類に名などはどうでもよい。

風のしがらみは、国際色豊かな空港ロビーにはふさわしくない珍奇であろう。（風来子）

神湊（こうのみなと）　(50)

楠　早鳥　作
福田長庵　画

火の山　その五

二日后、赤間関に氏俊を送り、独り残った明継は弘世と対談した。

「宗像殿には、照亮がお気に入られたかな」

頬に薄く笑を浮べて弘世が問いかけた。

「黒川の若殿ならお年頃といい、格式といい何一つ不足は御座いません。御高配のほど有難く御礼申し上げます」

「時に、婚儀は如何する積りじゃ神代このかたの名門、宗像殿の御息女と当家でも大身の世継ぎとの婚儀とならば、今日の明日と言うわけにもいくまい」

「その儀ならば御懸念にはおよびますまい、るい様もお年頃の事ゆえ、それ相応のお仕度は整うております。ただその時期が問題で御座います。今ただちに事を運べば探題殿は警戒の色を深められましょうが、それがし上洛してからの仕事は随分と容易になりましょう、さて」

明継は、るいの婚儀についての出費は出来得る限り最少限に喰止め、この機会に資力を貯え、状勢の変化に備えたかった。ましてや大内の経済の支配下におかれるのを最も用心した。

されば九州の情勢が落着き次第挙式を行うこととし、それが完った后、京へ上るように言いおいて立ちあがりかけた弘世へ

「御館のお見通しでは、何月頃と判断されますか」

と問いかけた。

「これは面白い、貴公にも相応の読みがあろう、比べてみるのも一興じゃ」

近習に紙筆を調えさせ、双方一枚づつ紙をとり、それに記した。

「よいな、婚儀の月じゃぞ」

顔は笑っていたが、目は射すような輝きを見せて明継に念を押したため完って双方紙をふせ、互の前に差し出した。

「皐月（五月）…」

同時に二人が声を出し、あとは口の中で含み笑いを洩らした。この時、明継は弘世が巳れと同じ推論の軌跡を歩んでいるのを肌で感じた。

皐月——巳の推量に間違いがなければ、年が改まれば九州の混乱は一応終息し、探題今川了俊は、来年中に解任され帰国する。とすれば大内は九州から撤退するか否かが今后の焦点となろう。まあ十中八、九、兵はそのまま門司関企救郡に駐屯させ九州計略の拠点としよう、これにより海峡の両岸を手中に収めれば瀬戸内海の海上権を掌握したも同然、これは対明交易を政策の重点とする幕府の存立に関ることともなる。これからが面白くなる、しかし弘世の寿命がどこまでもつか—

「如何した!」

「はっ」

不意に想念を破られて明継は返事に窮した。

「いや何でもない、儂もすでに老令の身、天運に随って幸い西国十州の大守とはなり得たが、万一不慮の病に倒れた后のことを想うと何ともがかりでな、矢張り凡愚の性は年をとってもなおらぬものとみえるわ、不幸にして、わが家中を見わたしても貴公のような経綸をもった士は見当らぬ、今后共よしなに頼み入る、その為にも宗像殿との紐帯は強いものにせねばならぬ」

こう言って弘世は席を立った。宿館を出た明継は今の会話を反すうした。海峡を渡ってくる初冬の寒気も上気をした頬に心地よかった。鈍色の空の下を船が往きかっている。

長福寺へ帰る道すがら、黒川照亮の幕舎を訪れた。屋外に陣幕を張り具足を着けた兵が入口を固めていた。戦陣の作法をそのまま行っているなと思うと、照亮の剛直な人柄がしのばれ好もしかった。番兵に来意を告げると中から照亮が現れた。陣中のことであるので濫りに人を通さないのであろう、これは確乎とした家風だと明継は心中うなずいた。氏俊警固の礼を述べ、立去ろうとすると、今夜、長福寺へ訪ねるので、何卒よしなにという話である。お待するので御遠慮なくと応えて背を向けた。

☆　☆

☆　☆

第四回玄海町 少年剣道大会開催さる

七月十三日、梅雨上の真夏を思わせる日曜日、玄海東小学校体育館に於て第四回少年剣道大会が行われた、試合開始三十分前、午前八時半には少年剣士達は日頃使いなれた防具を肩にかけ、続々と集合し練習を開始し、すでに試合開始前に熱気は館内に漲り熱戦が予想された。

最近青少年の非行防止の一環として、社会体育事業として各地に、各種スポーツが取りあげられているが、特に礼儀を重じ根性を養成する剣道が多く採用され著しくその成果をあげている。

当町もすでに十数年前より奨励し、現在玄海少年スポーツ団、池野少年スポーツ団、岬少年剣道と三教室となり、今年は特に玄海町より優勝旗（高学年団体優勝チーム）玄海町農業協同組合より大トロフィー（低学年団体優勝チーム）又高学年、低学年団体優勝チームに宗像大社よりトロフィーがそれぞれ贈られた。尚個人優勝並びに二位、三位、高低学年に町よりトロフィーが準備され、殊に優勝旗、大トロフィー第一回争奪で、各教室とも其の熱意は盛んなものであった。

定刻九時開会、玄海町長外来賓の挨拶、試合上の諸注意がなされ、団体戦・高学年、玄海対池野、低学年、玄海対岬チームにより火蓋が切って落された、日頃鍛えし技倫と闘魂が激突し、一喜一憂白熱戦が繰り広げられた、又その声援は折からの篠つく驟雨もたちまち逃去る程で、特に低学年一、二年生の部では、竹刀よりも丈の小さい豆剣士の力闘は、父兄をして涙さす好試合があったり、又時には滑稽な対戦もあり、終始会場は喝采の拍手であった。

因に戦績は次の通りであった。

団体戦　優勝　高学年　池野少年スポーツ団
低学年　同じ
個人戦　高学年
優勝　玄海　嶺　俊光
二位　岬　萩野清治
三位　池野　矢原吉房
低学年
優勝　玄海　新栃英文
二位　岬　貴福健司
三位　岬　広橋盛雄

（写真は力闘する豆剣士）

以上の戦績で、優勝旗授与、表彰には惜しない拍手が送られ大会は終了した、各チームが来年を約し、各ライバルと手を握りあって明るく解散した。

剣道連盟宗像支部花田新太郎支部長、同安部一義理事長、又町内審判の諸先生、会場諸準備の学校、社会体育指導の先生に会の盛会裡に終了した事を深く御礼申上げると共に、今後共青少年育成指導に御協力賜りますことを紙面より御願い申し上げます。

話題の新車をみる（六）
マツダ・ロードペーサーAPの巻

前月号に日産低公害車第一号ーズとしてモデルチェンジたばかりのもの。東洋工業ではホールプレジデントD型を紹介したが、デン社からパネルで輸入して組立これと並び対照的な大型乗用車として、今月号は中堅メーカー東洋てており、そのまま流用の部分も工業のAPシリーズ頂点誕生車多いが、エンジン・マウンティマツダ・ロードペーサーAPングの違いや床板の変更等がみられを紹介したい。

一口に、今回のロードペーサーは、アメリカ車のボディと夢のロータリーエンジンとを組合わせたものである。オーストラリアのGMホールデン社のこのボディは、HQシリーズのキングスウッド・プレミア・ステーションの中のプレミアであり、HJシリ

ーズ・ステーションワゴンをベースとしてロータリーエンジンを搭載したもの。

リアスタイルは、虚飾を捨てた端正なデザインの中に、新しい豪華さと国際的な機能美が宿り、全長四八五〇ミリ、全幅一四六五ミリで広い車幅とどっしりした安定感はいわば「走るオフィス」と呼べる高級車の風貌である。

プレジデントD型にみられる内装・装備品・車格感のそれにも増して、ロードペーサーに利点ありとすれば、当然ロータリーエンジンそのものの魅力ー小型で高出力かつ静かで滑らかNOxの数値が小さいことであろう。

このエンジンは、ルーチェGTに用いられている。

一三B型六五四CC×2ロータリーだが、圧縮比九・四、吸排気ポートタイミング修正し、サーマルリアクター容量アップ、気化器にパワーバルブを追加する等の改造を加えて、中低速トルクを向上させて、一三五PS／六〇〇〇rpm、一九Kgm／四〇〇〇rpm、最高速度一六五Km／hを得ている。

安全のための装備品として、防眩脱落式ルームミラー・ブレーキ故障警告灯・熱線プリント式リアウインドーデフォッガーなど。

又、オートマチックやパワー機構として、リモートコントロールフェンダーミラー・パワーウインドー・トランクリッドオープナー等が採用されている。

× × ×

宗像史蹟（17）
山田増福院（一）

一、

九州屈指の怨霊物語として広く知られている山田増福院の地蔵尊由来についてのべることにする。

記載する内容には史実に諸説あって、いづれを真疑とするか不明であるので、宗像追考記、筑前続風土記、山田地蔵尊由来記その他二、三の記述を適当に引用してのべることにした。

二、

記載するに当り本誌第百四十七号（昭和48、3、1発行）の「許斐山」（一）の最下段の黒川刑部と氏続との不和から内争のきざしがあったが、重臣のはからいで事なきをえたという項からのつづきになっていることを回顧していただきたい。

永正元年（一五〇四年）宗像氏続は兄氏氏（氏佐）から大宮司の職を受けつぎ、宗像家の安泰をはかるため周防大内家の幕下となって、正氏は周防山口に出仕して深川（須川）黒川（墨川）の両地を知行して、黒川に屋敷をかまえたので一時黒川殿といって、全く大内家の御家人のようになった。

宗像では天文元年（一五三二年）豊後の大友勢が三千余の軍勢で押寄せ一時は危機に瀕したが、氏続、氏男兄弟が大友勢の背後をついたので、敵勢も前後に取籠まれて、遠賀方面に敗走した。よって敵勢の再襲に備えるため、使者を大内義隆の下に送り、援兵と共に適当な大将一人を願った。それで義隆は宗像家の多年の忠誠に対して黒川刑部少輔隆像（たかかた）と郎党を宗像に遣わしたので氏続

は、かれらを名残城に居住させた。よってその後重ねて大友勢は攻入らなかった。しかし日時を経るに従い、黒川刑部は権威をふるいはじめ、氏続との間に相反目して争乱のきざしが見えはじめた。よって宗像の重臣石松尚貞、許斐宮司として氏璧、占部惟安、吉田氏致らは主君氏続に「今黒川殿と仲の悪い事が山口に聞こえたら義隆公から御咎（とが）めをうけて、御家を亡ぼすことは疑いない。よって御齢（とし）もとられたので御弟の氏男殿に社職をゆずられて、御隠居されたら御家も安泰になること、思う…」と理を尽して諫言した。

氏続もついにこの言を容れて、天文五年（一五三六年）二月入道して良寛と号し、黒川刑部の息女を同年五月に嫁がせた。ここに両家は円満に進み、その後黒川刑部は周防山口に帰ったので、後任に筑前畑の城主香月兵部少輔興則の弟隆光を遣わし、名残城に住居した。

自らが入り、香月隆光は粕屋方面の押えに西郷の居城に入れた。黒川刑部としての氏男は天文八年（一五三九年）から十三年（一五四四年）まで黒川の居城に在住したが、その間留守の間の高ケ嶽城には吉田飛弾、占部越前を大将として石松信馬外の家老重臣が守りを堅くしたので安穏であった。

三、

天文十四年からは氏男も宗像大宮司としての社職に務めたが、天文二十年（一五五一年）八月六日になると大宮司氏男と香月隆光が連立って宗像を出立して九日に山口に安着し、十一日築山の御所で義隆に目見得て、連路出仕の労をねぎらわれ、大友、島津両氏の軍謀について談合した。

両人が滞在して十数日後の二十六日になって義隆の譜代の家老陶尾張守晴賢が子息隆房らと逆心を起し、山口を攻略に向った。両人は一大事とばかりに総勢五百騎を従えて敵将宮田斐守、江良丹後守のひきいる三千余騎と力戦奪斗したが、搦手（からめ）が破れ、築山御所にも火災が起り、義隆はいずれかへ落のびたのが注進され、たので、今やこれまでと両人も長門に向って落のびた。すると義隆は深川の大寧寺に在ることを聞いた両人は、途中からとって返したが、義隆は既に昨日自害して、一家一族も討死、自害したとのこと で、「われらも武門に生まれて生恥かんよりは……」と両人共に腹を切って倒れたという氏男年三十三であった。

氏男の死去については諸説あって前記の史料によれば義隆の自殺を知り子後を追って落ちる途中多勢の敵に追撃されて、追払えども力尽きて永上（ひかみ）というところで討死したということである。

つづく

久留米工業学園
短期大学助教授
田中政喜

第三回親善野球大会
対太宰府天満宮

当社野球部員の雄姿

職員の親睦を目的とした当大社野球は、結成以来今年で三年目を迎えた。

嵜父称宣を監督に部員も十二名を数え、地元町長杯戦にも出場、準決勝迄勝ち進んだ実績もあり、又宗像警察署、東郷青年会との激戦も経験、現在八勝五敗の戦績を残している。

特に太宰府天満宮とは毎年、定期親善試合を行ない、今年は当社が当番に当り、去る七月十八日、天満宮チームを招待、津屋崎町の厚生年金球場で炎天下のもと、華々しく試合が開始された。

初回早くも天満宮チームは幸運な安打とエラーに恵まれ、大量四点を先取、以後宗像チームはづるづると後退し反撃のかいもなく結局本年度は天満宮チームの完勝におわった。

今年は当社は第二宮、第三宮遷座祭等の大きな祭事が斎行され関係上、当社チームは練習量に乏しく、一方天満チームはすでに数試合を経験、最高のコンデーションを作り上げて試合に望んだ。

このように日頃の練習による体調の差が大きくものをいい結果の上に顕著に現われたようである。これで対戦成績は一勝一敗一引合けとなった。

来年度は太宰府天満宮の当番であり、太宰府での勝利を期して頑張りたい。

第六回 宗像大社歌会詠草
毎月五日〆切　詠草到着順

福岡市　梶木　卅児
故里の小川のほとりよみがへる蛍の光に立ちかねつ

吉　武　白木うめの
塚水の中に放せしあさり貝少しづつ動くつるぎてをり

津屋崎　内田　久美
紅き蕾許多つけし境内の桜美しと吾も誇らし

宗　像　中村　幸
国宝の伽藍の大き屋根の上鳩一羽止りて西陽となれり

津屋崎　占部　由久
雨の夜半いねがてに居れば木ホーと呼びかくることぶくろの鳴く

武　丸　原田　リノ
松の木の瘤かと見えし蜜蜂の固りてひっそりと雨に堪えをり

福　間　廣渡　市輪
満中陰納骨終えて亡き妻の遺影を更にじっとみつむる

宗　像　早川　須磨
水はれる青田に広く西日さしがやく海のごときさざ波

八幡西　安川　浄生
小雨降る庭ひとつころ明るさは連翹の花地にあふれ咲く

福　間　高松幸次郎
眉間にびうぶの如き山荘り大社の北を堅く護れる

津屋崎　麦野　時雄
隣村の農娘ふれ売りリヤカーに甘夏柑といちごな満載

宗　像　片山　一
幼なき日通ひし此処の川土手に昔のつばな群れてゆれをり

福　岡　吉田　信夫
嫌ったる〻鳩は宮辺に来て渡りわがまくパンに集ひ寄り来る

宗　像　吉田　直志
襲い来し霧のたちまち消えたりて深い谷の暗み視界ひらく

（久住山頂）

宗　像　原田まつ代
宗像誌に読みし唐変木は間抜け者吾がこしかたも阿呆道かな

東　郷　田中　春子
まこまるめ詩作に飽きておもむろに切りとりし瓜紙上に集む

田　熊　今村　重刀
水清き那珂川べりの湯の宿のあふる〻湯槽に老等くつろぐ

福　岡　桜井　ツ子
日ひと日降りたる梅雨のゆふぐれて仏壇を購ひし去年を夢見つ市況不安の西瓜苗植ゆ

田　久　小方　実
銀鱗の潮吹を浴びて魚あげる母子の頬に夕陽かがやく

田　久　立花　勇雄
水張りし田面に映る城山を乱して老の代をかきおり

田　熊　力丸　一郎
つゝじ晴鶯鳴きて暑き忘れ唯絶景の鶴見山頂

田　熊　鷲津かつ代
トンネルを抜けてまた入るトンネルに新幹線の窓あわただし

田　島　吉武　武雄
カタカタと機械の音も調子良く植え行く早苗水面にゆらぐ

徳　重　石松や寿子
人手なく一丁余りの田の草を兄と手取りし遠き日思ふ

曲　天野トモエ
掌にのせたきほどの小さき鉢風蘭の花白く薫れり

東　郷　藤崎　辰子
柔かき筆もて拭ふ一対の埴輪にたまる薄きほこりを

宗　像　竹原　圓
豊作の今年の梅は買う人も貰う人も来ず裏庭に落つ

武　丸　立石ろせ乃
篠竹に覆われて古り墓石に母若かりしおもかげを追う

深　田　中野　節子
髪に結ぶリボンはづませインド少女は松葉杖つく

原　町　八波　五月
夢の間に新幹線は古都に着く馬酔木の匂う奈良公園に

宗像大社歌会 俳句作品集 (一五〇)

土穴　八尋恒夫
七夕に一人娘の手本書き

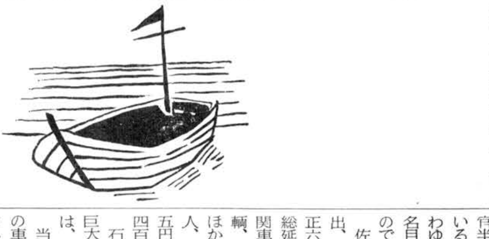
津屋崎　井浦良介
梅雨明けの海よりはじける子の歓声

福岡市　入江柳江
つゆ晴間埋葬の姉九十二才

田熊　力丸一郎
老いて我浅酌低唱初夏の宵

藤沢　玄洋子
濡れつばめ飛び来る方の俄か雨

田島　有吉唐水
梅雨あけぬ蛙の声の夜もすがら



西日本新聞社刊・滝口凡夫著

創造と可能への挑戦

—出光佐三の事業理念—

第三章　創　業　(二)

満鉄に売り込む

下関の漁船向け燃料油の販売がいとぐちについた大正二年、佐三は神戸高商時代の友人を頼って、初めて大連から満州に入った。

若い優秀な青年たちが『大陸経営』の夢を抱いて、ぞくぞくと海を渡った時代である。佐三にとっても、大陸進出はかねての念願だし、狭くて繁雑な国内よりは広大な新天地の方が、志をのべるにふさわしい場所であった。

大連の北欧風の建物、整然とした市街、見渡すかぎりの広野の中を一直線に突っ走る鉄道、勤勉な中国の人たち。佐三はいっそう大陸に魅せられ、進出の決意を固めて帰った。

佐三がまず目標と定めたのは南満州鉄道(満鉄)である。

日露戦争の結果、日本は遼東半島の租借権と満州(現在の中国東北地方)における鉄道、および鉄道をめぐるぼう大な権益を手に入れた。日露講和条約調印の翌年、明治三十九年十一月には早くも半官半民の国策会社満鉄を設立している。本社は大連市に置いた。いわゆる『関東軍』は、満鉄保護の名目で獲得した駐兵権に基づくものである。

佐三が耐寒用車軸油の見本を提出、本格的な売り込みに入った大正六、七年ごろの規模は、鉄道の総延長六百九十マイル、車輛は機関車、客車、貨車合計約四千七百輛、従業員は職員、雇員、嘱託のほか傭員を合わせて約三万八千人、また営業収入は九千六百二十五円(大正七年度、うち鉄道四千四百九十九万円)に達していた。

石油の需要家として、これほど巨大な企業は国内にはない。佐三は、鉄道用車軸油に着目した。

当時、日本石油の製品に青い色の車軸油があった。シリンダー油としても使えるほどの質の良いものだったが、国内市場は先にも述べたように外資二社も加えた過当競争の時代である。それに値段も高い。売れない製品が、ぼう大なストックとなってたまっていた。

困った日本石油は、特約店の出光商会に販売を促進するようしきりにハッパをかける。『値段を下げたら売れるだろう』とかけ合ったが、『それはダメだ』という返事である。

佐三はふと思いついた。『そうだ。これは満鉄の車軸油として売ろう』

業界の常識からいえば、まことにとっぴな発想である。国産油を満州まで持っていって、強大な国際石油資本と対抗できるなどとは、とても考えられないことだった。競争力の差は、国内市場をみてもはっきりしていた。

明治政府が外国からの輸入品に初めて関税をかけたのは、三十二年から実施した関税定率法によってである。幕末いらいわが国には関税自主権がなく、二十七年の条約改正でやっとそれを獲得したからである。このときの石油にたいする税率は、一ガロンにつきバラ積みが一銭、カン入りが一銭五厘だった。

そのご、つぎつぎに引き上げられ、日露戦争後には灯油で十ガロン九十六銭となっていた。

ところが、四十年ごろから原油の輸入が始まり、これを契機に激烈な関税論争が展開されることになった。引き下げ論の主唱者は石油事業にも進出していた浅野財閥の総帥浅野総一郎、引き上げ論者は日本石油社長内藤久寛、宝田石油社長山田又七だった。

結局、引き上げ論が勝ち四十一年から実施されたが、これによってスタンダード石油系の南北石油の製油所計画が取りやめとなり、ライジングサンが建設(四十二年完成)した福岡市郊外の西戸崎製油所も、大正四年には製油を中止した。

関税を上げるか下げるかは、国内石油業者にとって死活の問題だったのであり、高い関税をかけて初めて国内業者は外油と対抗することができた。

一方、満州はどうか。日露戦争後、ロシア油が撤退したあと米、英系の石油資本がどっと進出していた。米系のスタンダード石油、テキサス石油、英系のアジア石油(ロイヤル・ダッチとシェルの共販会社)がそれで、販路拡大にしのぎを削っていた。とりわけスタンダードは、満鉄の納入に圧倒的シェアを持つほか、鉄道の長距離運賃逓減の契約を結び、全土に強大な勢力を振っていた。もちろん関税はない。

関税をかけて、やっと外油と太刀打ちできる程度の国産油を、運賃をかけて満州まで運んでも、どうして競争することができようか。常識では、絶対に不可能との結論しか出ない。

『満鉄に売ろう』という佐三の提案を聞いた日本石油の販売店長は、てんで相手にしなかった。『君はすこしどうかしとりゃせんか』まではよかったが、とうとう『低能じゃないか』とまで言った。

佐三は怒った。『売れないものをいくらかかえていたって、何の役にも立ちはしない。それなら、満州に持っていって売ったほうが良い。ストックをかかえて手をこまねいている、君こそバカだ』とやった。

親会社の店長に向って『バカ』と言ったのだから、ずいぶん問題になった。

余談だが、若いころの佐三は、しゃくにさわるとすぐ『バカ』というクセがあった。満鉄売り込みのとき本社の用度課長を相手に、これをやって問題を起したし、大正末期の台湾進出のときも大阪商船の支店長とこれでケンカしている。

佐三には成算があったのである。満州旅行とそのごの調査で、関税もないのに外油が不当に高く満鉄に納入されているのを知り、品質さえ良ければ国産油を持ち込んでも販路を広げることができる、とおおよその見当をつけていたからである。

本格的な売り込みが始った。満鉄で使っている車軸油を取り寄せ成分や性質を分析する。国産油をいろいろ調合して、これに似た車軸油を作り、試験を繰り返す。貧弱な店の設備を使って、こうした調査、研究を進めて見本油を完成し、満鉄に持ち込んだ。

思わぬ障害があった。満鉄の用度品規格である。佐三には、車軸油として十分使用に耐えるという自信があったのだが、満鉄の規格に合わないから買えない、というのである。

満鉄は創業当初から、スタンダードなどの外油を使っている。石油類だけではない。鉄道そのものが、国内と違って広軌だし、機関車から客車、貨車まで最初は米国から輸入し、それをまねて沙河口工場で自社製していく、という方式をとった。当然、規格も米国製に合わせて定められている。

石油の場合、外油と国産油とではもともと性状が異なる。出光の見本油は規格にくらべ、とくに比重が高く引火点が低い。だからダメだ、というのである。

佐三はねばった。本社の用度課でラチがあかないと見ると、こんどは現場に回り、技術者たちに説明した。技師の自宅に〃夜討ち〃をかけた。

とうとう、実地試験までこぎつけた。技術者たちにも、できれば国産品を使いたい気持がある。出光の見本油が、規格のことは別としても、実際に使用に耐えるかどうか、試してみようというのである。

機械による試験は、大連市西郊の沙河口工場で行なった。この工場は、大連にあった陸軍鉄道部の旧工場を移転、さらに新鋭設備を入れて明治四十四年に完成したばかりの、満鉄最大の製修工場であった。続いて実施した奉天(瀋陽)―撫順間の実地運転試験でも、ほぼ外油と対等の結果が出た。

しかし、実際に採用されたのは大正三年になってからである。

実験に成功したあとも佐三は、満鉄の本社はもちろん撫順機関庫などの現場を、実に足まめに歩いて売り込みに努めている。血のにじむような努力が、ついに外油の厚い力べ、満鉄の官僚機構の一角を突き破ったのである。

量は少なかったが、おそらくこれが満鉄に入った最初の国産車軸油であり、その意味でも画期的なできごとだった。

この直後、大正三年五月に秋田市北東の日本石油黒川油田で、ロータリー五号井が大噴油した。わが国の陸上油田では、こんにちまで空前絶後のもので、東京株式取引所(東京証券取引所の前身)では日本石油を初め石油株が暴騰、ついに日石株が売買停止となるほどの騒ぎであった。

満鉄の国産油納入が、いっそう活発になったのはいうまでもない。出光商会は大正五年には大連支店を開設している。

もう正月も間近い大正七年十二月、大連の満鉄本社から門司の出光商会に一通の電報が届いた。『厳寒のため車軸の焼損事故が続発、対策を急いでいるから、見本油を持ってすぐおいでいただきたい』という文面である。

最後の七文字『スグオイデコウ』まで目を走らせたとき、佐三の目にうっすらと涙がにじんだ。

ちょうど二年前の冬、佐三は新しい耐寒車軸油の見本を満鉄に提出していた。競争品である外油は、熱帯、温帯、寒帯共通のものだから、満州では厳寒期に入ると油の粘度が高くなり、車輛の運転能力が落ちる。そこで、寒期専用の見本油を作り、三百箱ほど納入したのである。

ところが、満鉄では佐三には知らせないまま約二年分の外油を買い込んだ。出光の見本油は倉庫でほこりをかぶったままであった。

あとでこれを知った佐三は激怒した。用度課長に食ってかかった。

『見本油を納入させておきながら、いざ買い入れのときには見積もりを出させるどころか一回の照会もない。情実買いではないか』

課長も負けてはいない。『油が良いから買ったんだ。文句を言われる筋合いはない』

『外油を使っていたんじゃ車軸が焼けます』

(次号へつづく)

〈年中行事〉

七月の主な行事

月の始めにはまだ梅雨期が残っていることもあるが、大体において本格的な夏型の天候、気候となる。ただし最近は不順なことが多く、冷害や集中豪雨に見舞われることがある。

富士山開　古くから霊山といわれていた富士山の登山は、役行者の伝説があるように古くから行われていたが、室町時代になると、単なる登山としてではなく、参詣としての登山の風が完全に成立し、江戸時代になるとこの風はますます盛んになって、富士講が組織され、多年登山した先達を中心にして、菅笠に白の装束、金剛杖をついて「お山は晴天、六根清浄」と口々に唱えながら登っていくのは、江戸時代の富士詣の風俗であった。七月二十七日を山仕舞といって登山の最終の日と定めた。

七夕　毎年七月七日の夕、牽牛・織女の二星を祭ることをいう。織女祭ともいわれ、古くはナヌカノヨと呼んだが、この夜牽牛・織女の二星が相会し、これに物事が巧みになることを乞い求めることから、乞巧奠とも称し、奈良時代から朝廷の年中行事として行われていた。江戸時代より、上下共にこれを祝い、民間では葉竹を樹てて、歌などを書いた短冊や、五色の紙を飾りつけ、張面、算盤、筆、硯などの張子を結びつけるようになった。

野馬追祭　一名駒取。相馬藩の崇敬社である福島県相馬郡中村神社、小高神社、太田神社合同の神事。もと相馬藩の練武、調馬のために行われ、七月十一日、十二日特に十二日には小高、太田両神社の神輿も加わり、およそ八百の騎馬武者が供奉し、祭場である雲雀が原に神幸し、本陣を午来山に置いて式を挙げ、供奉の騎士等が、神号旗を競い取って神前に献じ、翌日、小高神社境内で、野馬掛の式を行った。

盂蘭盆会　盂蘭盆経の説に基き、毎年七月に、祖先の霊を祀る供養会をいう。盂蘭盆経に、仏弟子目連が六神通を得、道眼によって亡母を見ると、餓鬼道に堕ち倒懸の苦を受けていたため、その救出の方法を仏に問うと、仏は、毎年七月十五日安居(あんご)が終って、十方の衆僧自恣の時、飯食百味、五菓を盆中に盛り、三宝に供養し、十方の大徳衆僧に施せば、現世の父母は寿命を保ち、過去七世の父母は餓鬼の苦を免れ、人天中に生きるであろう教えだという。この自恣の日を盂蘭盆会、略して盆と称し、自恣、聖霊祭、魂祭ともいう。室町時代の初期から盂蘭盆中に、男女群なして念仏を唱えながら踊る盆踊が行われ始めた。その後江戸時代を通じて盛んとなり、各地方ごとに特色のある多くの盆踊や踊歌を生み、今もなお行われている。

祇園祭　京都の八坂神社の祭礼。祇園御霊会、祇園会ともいう。古くは、毎年六月七日神幸祭、十月四日に還幸祭が行われたが、明治維新以後は、七月十七日神幸祭、二十四日に還幸祭が行われる。貞観十一年(八六九)疫病が流行したので、社司卜部田良麿が勅を奉じて、六日七日長さ二丈の鉾を、全国の国数に準じて六十六本立て、十四日には洛中の男子を率いて、神輿を神泉苑に送り、疫病退散のための祭礼を行い、祇園御霊会と称した。今日鉾や神輿の巡行はこれから始まる。

厳島宮市　正しくは管絃祭。船中で管絃を奏することから、船管絃ともいわれ、陰暦六月十七日に厳島神社で行われる祭礼。六月上旬から、諸国の宮人が多く集まるので、宮市の名が出た。十六日の夜は、御船組と称し、御船三艘を御池に並べ、種々装飾をこらし、十七日は御船中(おふねつけ)と称し、申の刻に復船を大鳥居正面からのり出し、大鳥居で管絃が始まり、地御前(じごぜ)に渡り、その後、大鳥居の内に漕ぎ入れ、夜半に式が終るが、この間船中で管絃が奏される。これを拝せんとして、遠近より集まった群衆が、大小の船に乗り、御船の周囲に群がり、山陽第一の大祭と称されている。

両国川開　五月二十八日から八月二十八日の間は、納涼といって、茶店、食物屋、見せ物小屋、咄、講釈の寄席などは普段は日暮まで営業が許可されていたが、この期間中は夜半までの営業が許可された。その第一日である五月二十八日は、川開といって両国橋と新大橋の間で大花火を揚げる。この日以後納涼の期間を通じて二、三度大花火を揚げるが、その費用は江戸市中の船宿と両国辺の茶店、食物屋から出される。大花火は、しだれ柳、大桜、天下泰平の文字、ぼたん等があり、これを見るための群衆で両国辺は雑沓し、隅田川には見物の屋形船などが満ち、江戸ッ子は、玉屋、鍵屋と花火屋の名を叫んで熱狂し、この花火を天下一と称したが、火災予防のため種々禁制が設けられていたため、他国の花火にくらべると、その規模も小さく仕掛も劣っていた。

天満祭　大阪の天満宮の祭礼。一名天満天神の鉾流祭。以前は六月二十五日であったが、明治七年以来七月二十五日に改められた。その名の起りは、六月朔日に鉾流島(大阪中之島公園剣先の上手)から、神主、社家等が神鉾を河中に投じ、その漂着した場所を御旅所と定め、ここに仮屋を造り、六月二十五日に渡御祭を行ったことになる。鉾流神事は元和六年(一六二〇)中絶し、行宮は便宜の場所に営まれた。

四万六千日　(しまんろくせんにち)　仏菩薩の縁日の一。元禄(一六八八～一七〇三)以後に始まったものと思われ、当日参詣した者は四万六千日間日参したのと同等の功徳を得るといわれ、当日の参詣人は平日の数万倍にも及んだという。江戸の浅草寺では六月十七、八の両日、芝愛宕神社は同二十四日、五日を四万六千日としたが、のち七月十日に改め、現在は七月八、九両日に定められている。

当社の祭事

七月一日・　月次祭
　十五日　月次祭・祇園祭
七月卅一日(大祓)夏越祭
八月一日・二日　夏季大祭

陰暦の六月晦日に行う大祓の旧習にならい、罪・穢を祓う行事であり、当社で古歌「水無月の夏越の祓する人は千とせの命延ぶというなり」を奉唱して茅の輪をくぐる神事を行ない、全国から寄せられた人形(ひとがた)を祓って、祈願者の安全と幸福を祈る大祓式が七月三十一日行なわれる。

暑中御見舞申し上げます

西日本相互銀行
福間支店
福間支店長　阿部正幸
電話 福間 ② 1231 1233 番

福岡相互銀行
古賀支店
古賀支店長　川添義雄
電話 古賀 ② 3636～38番

福岡銀行
宗像支店
宗像支店長　力武二三生
電話 宗像 ② 2017．2214．2721番